河の水は、余をして詩趣を味はしむ、我が縣下の利根川然り、水神々しく流れ、神秘の極めざるなし、利根の水を思ひて赤潮の『あやめをどり』を思へ藤田東湖の『總北城南十六洲、田園到處引春流、胡兒體道能騎馬、五尺村童巧盪舟』が十六島詩を想ひ、彼の偉なるを感ぜしむ。

次は漢江なり、漢江の水、時としては好く澄み、時としては濁々と流る、柿色の帆を上げたる朝鮮船の江を上下する趣き、又他國の河水として別感を起さしむ、附近の山樹木を見ず、赤土山也、余此の山水を支那揚子江の繪の如しとす。

海の水

海の水は、余の鄉里近き太平洋鹿嶋灘こそ、余に深き印像を與へたり。彼の砂原つゞきの海岸に岩なく、打寄する浪は、赤みを含みて、浪の高き事、音の高き事に於ては人をして大海の趣味あるを思はしむ、次は余の渡鮮中渡りし玄海なり、之れ朝の內にして浪々として寄する大波は、山の如く、千噸近き汽船を自由に動かす、船體に波の寄せては碎け、泡水飛散して、甲板を洗ふ、太陽正に登らんとして、金波銀波の波靜かならず、水また綠に、赤みを含み居れり。

雨水

春雨は余をして雨を愛せしむ、山また森は、春霞の包む處、小糖の如き、三味線糸の如き雨——柳の芽の黃色きあたり、通行の人さへ、梅雨を排すも、春雨を排せざらむ、田舍家藁積み、若芽の樹木を畵く春雨の時、亦變らず、濁れる梅雨と違ひ、春雨は濁れるうちにも、晴ればれしたる風あり、晴れたる翌日、雨水に映る梅花などの寫生も、一味あらずや、然るに一時の降雨にありては、美を失す、之れ激しければ也、水濁れば也。

水の結論

余は前述に於て種々を論じたり、紙數の限りあれば、大體を述べたり、水は余等に美を與へ、生を與へ、教訓を與ふ『水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友による』とあり、又種々あり水或は英雄と言はむか、常に在りては自由に使はれ居れど、一朝洪水とあらば、國民の生を失はす。

澄みたる水に、物を投ずれば、水は圓波を作る、澄みて流るゝあり、濁りて荒れて流るゝあり、海の水の如き狂へるありて、水の趣味實に大也。（韓國京城、塔村生）

○

川より

○私の國は山國です。——私は海を知らんといふではないですが、唯、くらい帆の影のチラ〳〵とする沖を得心する迄味つて見たい、漁村の臭みを嗅いで見たい、泥をかづいた蟹の出入する石垣の上で、鯊釣の辯當に舌鼓を打ちたいといつた漠然とした考と、水の研究といつた高尙な問題とか、ゆくりなくも折合がついて——近頃の情意投合つてんでせうか——せめてもの心いせと、唯今、川へ參りました——川——櫻の露の滿ちたといふ吉野川です。

○午後一時　夏のまさかり、私は背から浴せられる光線を凌ぎ

凌いで、一町余もある石原を横ぎりました、蓬がもう息も絶々になつてゐます、日光が飽までもと、男性的なオーダシヤスな強い力で磧を射て、陽炎かモヤ〳〵と立つてゐます、白い石がギラ〳〵と光ります、私は波のサラ〳〵とよろ汀に佇みました、川は滔々と流れてゐます、川は西流してゐます、川向ひには東西にかけて、川を覆ふ様に竹籔が連つてゐて、此方岸は廣い〳〵石原です、私の佇むだ所は、瀬の落口から六五間下です、瀬は丁度漏斗の口の様になつてゐて、廣く油の様に流れて來た水が、此の口へ來て瀬となるのです、廣く平らに流れて來た水が、急に集まつて、ザーッと一際立つて、面白い歌を嘔います、

○太陽が七十度程の角度で、水面を射てゐました、私の眼は日光に輝く瀬の落口に移りました、**ウオルトラマリン**の一刷毛かとも見た空に、中景の水が、平和な譜美を漏らしてゐるかの様て、輝のある**コバルトにレーキ**を浮べてゐるのでした、——私の眼には、此時中景が明るかつたのです——瀬の落口は單純な**ホワイト**と見ましたが、中々、瞳を凝らせば**ブルツシヤンブリユー**や、**ガムボーヂ**、**レモンイエロー**などが潜んでゐるのです、その兩端は**パープル**を彩どつてゐますし、小石に碎ける波と波の間は、フックリとした、豐かな色調が現はれてゐました、遠い水や籔影は**インデイゴー**の閃がありました、

○北の山から崩れ〳〵た雲の峯が、雲の峯を吐き出して、牡丹の花片の様な團雲がコロリと太陽の前に立ふさがりました、と、急に、前景から中景にかけて曇りました、遠景の樹林は雲の景から漏れた光線に輝いて、鮮やかな**サツプグリーン**が浮出しました、蔭つた遠くの樹は黑ずむでゐます、前景がいやに暗く、やゝ**セピア**の加減も交つてゐましたし、**シトリーン**が沈むでゐました、瀬の落口から上は思ひのまゝの**インイデゴー**の活動が見へました。

○やがて雲の東漸と共に、遠景は太陽から疎んぜられて影りました。前景が十分の明るさで、今度は瀬の落口は、前の丸みが全然かけて至極單調な趣になりました。

○一瞬一刻、須臾にして變じゆく此の自然の美妙な色彩にウツトリとして、この偉大な變化を心行くばかりに味ひました。パナマ帽の隙を漏れた夏の氣が、多大の壓迫を私に加へると思ふと、ダラ〳〵と汗の流れるのを覺へました、ドレ一汗流して……と立上りますと、今迄氣付きませんでしたが、上流から下流の淵にかけて、銅色の背が波のまに〳〵戯れてゐるではありませんか、堪りませんね、パット手速く脫衣しましたね、ソシテサツとばかり波を破りましたれ、此の間の消息は實に圓轉滑脫ともいひませうか、私は波に任せて二町程流れ下りました、そこは水がドンと向の崖に當るので、淺瀬から急に、湛然たる淵となるのです、蛙が水に浮いた様に足をグンと下げました、**エメラルド**の匂がします、やがて向ひの崖につきました、崖には水中に儘かばかりの足場が出來てゐます、岩です、そこへ立ちました、美くしい水が、私の足をめぐりめぐつて流れます、川は方向を玆に更へて南流します、崖の上一丈ばかりもあるで

せう、撫子などが咲いてゐます、ですから私は蔭の所に立つてゐたのです、私は目を移して足を見ましたすると、左の足の大腿部——水の當る部分がバーントシーナの淡い彩色で、その蔭影になる部分は、ウヲルトラマリンとプラツシヤンブリユーとの混色が極々、鮮明に現はれました、唯關節の最も大なる陰影のみが、矢張强いバーントシーナにライトレツドの閃でしたここで十分餘も立つてゐましたらう、向の筏の上に遊んでゐる小供の聲がハツキリと聞えます

「あの人は何を見てるのだらう」

○今度は向ひ岸に渡つて磧原に坐りました、私の地平線は殆ど水面に近いのです、

先の雲がいつしか東に立つて、虛穹唯何らの妨もありませんでした、白日は、意のまゝに振舞つてゐます、碧潭一里、水は夢みる兒の笑顏の樣に、小い唇を動かせてゐます、蒼穹が靜な水に移りました、水面は鮮かなパープルで影の部分がバイオレツトに彩どられました、波も立たず閃もない、私は磧原を東にポツ〳〵と歩みかけました

それでは筆を止めますよ御免——(大和、石田桂雨)

○

みづのいろ〳〵

水は外物を假りて、多く趣をなす、溢流に橋の架する、亭樹の水に臨む、紅燈の水に映ずる、流螢の水面を飛ぶ、小艇の水に泛ぶ、漁夫の綱を飜す、兒童の綸を垂る、水禽の水を掠めて飛ぶ、皆水に趣を添ふ。

影の水に映じて趣味あるもの、曰く帆影、曰く橋影、曰く山影、曰く塔影、曰く花影、曰く月影、曰く燈影、曰く雲影、曰く樓影、曰く鳥影。

聲の水を渡りて趣あるもの、曰く櫓聲、曰く鐘聲、曰く絃聲、曰く款乃、曰く笛聲、曰く禽聲、曰く擣衣聲。

夜雨一過、街上燈光滿地、吾此光景を愛す。

夜水は活氣なし、唯だ燈影の落村を得て、活氣あり。

(日本人第五百十七號、市島春樹)

○

水にうつる影には二通りある

水の面には、一つの物體が同時に二通りの影になつて映ります。雨天の日などには、そんなことは有りませんが……否や!……あるのはたしかにあるのでせう、けれども太陽の光線が弱い爲めに見えません

例て一寸此の處に、一本の青々とした綠の木が池邊に有るとしますと、淸く澄んだ水の面には見るから凉しさうな青々とした木の影が、漂ふて居ませう

普通畫には、この影のみしか、かいて有りませせん、然し氣をよく付けて見ると、もひつと影が映つて居ます、その影は美しくは有りません。

ちよつと見た所では灰色をして居ます、この影は、人の影が地面に薄黑くつうつるでせう